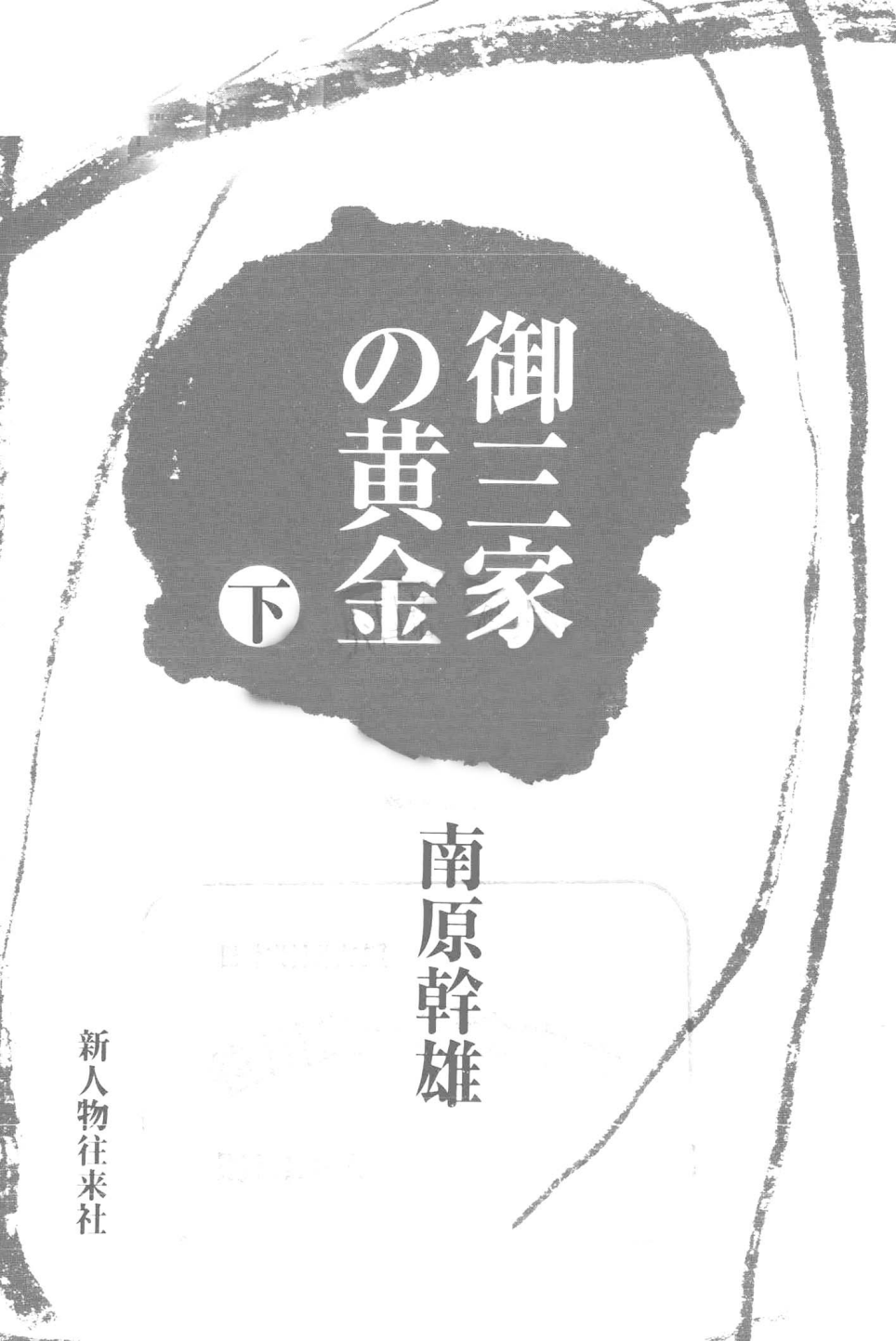


御家の黄金

下

南原幹雄





御三家 の黄金

下

南原幹雄

新人物往来社

〈著者略歴〉

南原幹雄（なんばら・みきお）

昭和13年3月、東京生まれ。早稲田大学政経学部卒。昭和48年、「女絵地獄」で第21回小説現代新人賞受賞。昭和56年、「闇と影の百年戦争」で第2回吉川英治文学新人賞受賞。主な著作に「鴻池一族の野望」「暗殺者の神話」「北の黙示録」「御庭番十七家」「御三家の犬たち」「神々の賭け」「寛永風雲銀」「覇者の決まる日」など。

御三家の黄金 (下)

一九八八年一月五日 第一刷発行

著者 南原幹雄

発行者 菅 英志

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三三三ー一 新東京ビルディング 一七〇〇
電話〇三（二二二）三九三一（代表） 振替東京六一一五一六四三

印刷所 明邦印刷

製本所 小高製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。



御三家の黄金 (下)
目次

東照宮の賊

7

人質

34

侃

61

義弘取り

101

暗号

150

蛇の穴

180

岡崎城

205

黄金の秘境

254

装幀／伴
颯

御三家の黄金
(下)

東照宮の賊

水戸東照宮――。

眼下に千波湖を見おろし、はるか東方に大洗海岸をのぞみ、西方に日光、筑波の連峰を眺望する景勝の地にたつ。社地はもと霊松山といったが、光圀が常磐山と名をあらためた。

元和七年、水戸藩祖頼房が父家康の神霊をまつて創建し、のちに二代、三代の將軍秀忠、家光の御霊屋をも建て、以後、歴代將軍の靈位を相殿に安んじてきたところである。

常磐山の麓に大鳥居があり、長い参道はそこからはじまる。参道は坂道になっており、塵ひとつないまでに掃ききよめられている。雁来坂がそのまま参道になっているのだ。その左右は神氣たちこめる鬱蒼たる老杉の林である。参道をのぼりつめればその正面に拝殿があり、その後が本殿である。右手には神楽殿と社務所があり、左手には神庫、その前に御手洗があり、神官の屋敷は山の麓である。社殿は総漆塗り極彩色で華麗をきわめた権現造りである。

山内は神域であり、立ち入りを禁じられている。

参道はもう一つある。雁来坂の裏にいわゆる裏坂があり、この裏道は勾配がやや急であり、社務所と神楽殿の裏にでる。

今、常磐山に闇がおりている。

東照宮は夜ふけの深いしじまの底にしずんでいる。

九月半ばの月はでているが、全山をおおう杉林のために、月光はさえぎられがちである。大鳥居の外となると、場所によっては多少あかるい。

今、大鳥居のまわりの闇がかすかにうごいた。

このあたりには、夜分でもときに野良犬がやってくる。

だが、今うごいたのは犬ではなかった。

しばらくたつと、またうごいた。

今度は人間であることがわかる。蓆むしろをかぶっている。乞食である。水戸にはちかごろこの手の乞食や浮浪人がふえているのだ。

その乞食は蓆から顔をのぞかせ、参道のほうをのぞんだ。

月の光が乞食の顔をうつすらと照らした。

安城万之助——である。

万之助は約五カ月前、小次郎とともに水戸城下新照寺で大崎勝之助に扮した水戸家の侍と伊賀流藤林党の忍者たちにおそわれたが、薬師丸と夜叉丸のはたらきで、なんとか難をのがれた。

その後、小次郎は江戸にもどったが、万之助は一人でしばらく水戸にとどまっていた。もう常州屋にはもどれないので、乞食に身をおとして城下に潜伏をつづけるしかなかった。

五カ月も乞食をつづけて、すっかり本物になりきってしまった。乞食の仲間からも顔を知られるようになった。けれども万之助はけっして仲間との集団行動をしない。いつでも単独で行動をしてきた。万之助は大鳥居のむこうの様子をうかがった。ちかごろ、東照宮の警備が以前よりきびしくなっていた。

東照宮は従来かくべつきびしい警備はおこなっていなかった。本来、禁断の地であり、若い神官が

時折、境内を見回るだけで、東照宮は幕府と水戸家の威光によっていままでも内部を侵されたり、荒されたことはなかった。

ところが最近では、水戸家の神社奉行与力や同心たちが参道の入り口や境内の要所を見回るようになっていた。

水戸東照宮に福岡一文字といわれる備前鍛冶則包のりかと、おなじく吉房の太刀と南都住岩井与左衛門作の甲冑、三十六歌仙扁額が社宝としてつたえられている。東照宮の警備がきびしくなったのは、この社宝を賊の手からまもるためだと当社の神主たちはおもいこんでいた。

万之助は闇をとおり、月の光をたよりに社内をはるかにうかがった。この時刻、社内の警備はいかがかとさぐってみた。

万之助は東照宮の警備がきびしくなったときから、

(何事かある)

とここに目をつけていたのである。

福岡一文字の則包、吉房や甲冑、扁額を賊からまもるための警備であるとは万之助は信じなかった。これらの社宝はもう約百年も東照宮につたわってきたからである。今までは何事もなかった。今になって賊にねらわれ、それを警備する必要が生まれたとはかんがえられなかった。

万之助なりの推理で、おもいあたることがあった。

(郷義弘——)

である。

松風郷が東照宮に保管されているのではないかとおもった。義弘が保管されていておかしくない場所である。それでこのところ、万之助は東照宮に注意し、常磐山の麓ふもとちかくを峙ねらにしていた。

一刻ほど前にうかがったときは、雁来坂の参道に警備の人影が見えたが、今はそれがなくなった。万之助は目数をかけて十分警備の様子をうかがい、それから潜入し、義弘奪取の計画をたてようとしていた。

と、そのとき……、

大鳥居のちかくの杉林から人影が二つあらわれた。

(……?)

万之助はとっさに警備の人影かとおもい、首を蓆の中にひっこめた。が、警備の者にしてはどうも様子が腑におちぬ。

万之助はふたたび、蓆から亀の子のように首をだした。

人影はことさら参道の隅の木の影をとって雁来坂をすすみはじめた。そのあるき方は警備の者とはちがった。

(おかしい……)

不審をいだいたとき、はやくも万之助は蓆の中をぬけだしていた。

そして身をひるがえして、闇の中を音もなくはしった。大鳥居をくぐって、坂下まできた。

万之助が雁来坂の下から闇をとおして見ると、二つの人影は坂上へむかって早足ですすんでいた。

(よし!)

万之助も覚悟をきめて、禁断の神域へ侵入していった。

さすがに緊張感ではじめは足のはこびがかたかった。

だが、参道をのぼっていくうちに、いつしかなれた。

(何者……?)

万之助は前をゆく二人の正体についてかんがえていた。

すぐには予測がつかなかった。

(盗賊か?)

とはじめに予想した。則包、吉房の太刀か、岩井与左衛門の甲冑をねらう盗賊がいたにしても不思議ではない。

しかし、二つの人影はうごきが俊敏な上、いかにも自信にあふれた足どりである。

(盗賊ではないかもしれぬ……)

万之助はそうもおもった。物盗りや押しこみの類いとはことなる雰囲気とその人影にはあった。武芸、武術で極限まで体をきたえあげた身のこなしに見えた。

万之助は前をゆく人影の正体に興味をおぼえた。

(もしや……)

紀州家がおくりこんできた者ではないかとおもった。

ねらうは郷義弘。万之助とおなじ推理を紀州家がしたとしてもおかしくはない。吉光をうばわれた紀州家が必死になって義弘奪取を強引にはかっているのではないかとかんがえた。

いづれにしろ万之助の血はいやが上にもさわぎたった。

今までずっと万之助は東照宮にねらいをつけていたのだ。慎重に時機を見はからっていた。その自分をだしぬいて、目の前で大きな獲物をさらわれてはかなわぬ。万之助は競争心がわきたってきた。

そのとき、二つの人影が参道をのぼりきる手前で、不意に地に身を伏せた。

拝殿のほうから提灯の明かりがちかづいてくるのが見えた。

警備の見回りが参道へむかってきたのだ。

万之助も参道の片側の杉林にとっさに身をかくした。

見回りの侍は二人で、提灯をかがけて参道をきた。寺社奉行所の同心であろう。

万之助は杉林のあいだから見まもっていた。

見回りは参道のほぼ中央をおりてきた。二人が身を伏せたところは参道の左側に寄ったところである。うまくすれば気づかれずにすむだろうが、運がわるければ見つかったも仕方がない。

見回りはちかづいた。

見回りは不審をおぼえたと見えて、たちどまって提灯の明かりをその方へむけた。

提灯の明かりの中に、不敵な曲者の影が二つ浮かびあがった。

曲者たちが間髪をおかず、おどりかかっていた。

万之助はおもわず、あっと息をのんだ。

二人の曲者のうごきはまるで獣のように、剽悍で闘いなれしていた。闘いの場数をふんでいる。

見回りの二人が提灯の明かりの中に曲者の影を発見したとき、体当たりするように突進していった。そして獣が獲物をたおすように二人にとびつき、たちまち地にひきたおし、おし伏せた。

提灯がとび、燃えだした。

万之助は息をのんで、一方的な闘争を見つめた。

曲者の一人は見回りの両衿をとって、ぐいぐい首をしめつけていった。

「うっ、ううう……」

くるしそうな呻き声がかきこえてきた。

数瞬のあいだ苦悶し、その後、首がぐくつとおちた。窒息死である。

いかにも手なれた闘いぶりであり、簡単なころし方である。万之助はちかくで見えて、背筋が寒

くなるものをおぼえた。

とても盗っ人や押しこみの類いではない。

つづいてもう一人の曲者も、今一人の見回りにおそいかかり、後ろへまわり、羽交い締めにしてから、今度は片腕を首へまわして、ぐいっ、ぐいっ、ぐいっ、ぐいっ、と締めつけていった。

ぐうっ、と気味のわるい呻き声がきこえた。

燃えあがる提灯の炎の中に、苦悶してあえぐ見回りの顔が浮かびあがった。もう死の寸前の表情であった。

やがて首の骨の折れる音とともに、首を締めおとされた。

二人ともまことにあつけない死であった。提灯が燃えおちる前に二人は命をおとしたのだった。

見事というよりも、おそろしいばかりな殺人技を万之助は目前で見た。武技、武芸ではなく、それは完全な殺人技である。しかもいっさい無言のうちに手早くおこなわれた。

(何というやつらだ)

万之助はとても自分たちとおなじ人間のような気がしなかった。

しかも二人のその後の行動も見事であった。

それぞれ、今ころしたばかりの死体を肩にかついで、参道から杉林をすこし入ったところへはこんで捨て去った。

万之助は呆氣にとられて見まもった。

(紀州家がおくりこんだ者であらうか)

寒気のようなおもいで、身うごきもせず、杉林の中に立っていた。曲者が死体を投げ捨てていったところからわずか数間の距離である。

万之助はこの二人をともに相手にしてたおす自信をもてなかった。残念だが、仕方がない。無謀な戦はさけるにしくはない。あえてたたかうは愚の極みだ。

小次郎とともにいるなら別だが、自分一人では勝負にならぬ。相手がしたたかな上に強すぎるのだ。曲者二人は参道をのぼりきって、闇にひそんで拝殿のほうをうかがった。

拝殿の権現造りの大屋根が、闇の中で月光に浮かんで見えた。

拝殿のむこうの本殿はほぼ闇の中にしずんでいる。中殿は陰にかくれて見えぬ。

権現造りというのは神社建築特有の様式で、拝殿と本殿のあいだに中殿があり、全部が同一の棟をかたちづくっているものである。

これが昼間なら、拝殿、本殿の豪華な総漆塗り極彩色が見られたはずである。

曲者二人はしばらく石灯籠の陰に身をかくして、あたりの様子をうかがった。警備の見回りがちかくにいるかどうか見ているのである。

万之助は曲者二人の後をつけ、参道の坂の途中にある石灯籠の後ろにかくれて見まもった。

拝殿にも本殿にも宿直の警備がついていることが予想される。警備のための番所がもうけられていたとしてもおかしくはない。

曲者たちはなかなか行動を開始しなかった。最初に見せた俊敏さと大胆さとはうってかわって、今度は慎重そのものである。

（容易ならぬ敵）

万之助は再度おもった。いつかこの敵とはたたかねばならぬときがくるかとおもうと、こころのひきしまるものをおぼえた。

拝殿の正面の階段のあたりの闇がうごいた。